

## 企画展「猪熊弦一郎博覧会」 記者発表会・プレスバスツアーのお知らせ



MIMOCA 外観 Photo: Yoshiro Masuda

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 (MIMOCA) は、2025年4月12日(土)から始まる企画展「猪熊弦一郎博覧会」に先立ち、2月12日(水)に記者発表会、2月13日(木)にプレスバスツアーを実施いたします。報道関係者の皆さまにはぜひともご参加いただきたく、取材賜りますようお願い申し上げます。

【展覧会名】

猪熊弦一郎博覧会

【記者発表会】

2025年2月12日(水) 13:30-16:00

会場：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 2Fミュージアムホール

【プレスバスツアー】

2025年2月13日(木) 8:45-16:45

会場：イサム・ノグチ庭園美術館、四国村ミュージアム、香川県庁舎東館

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 / 公益財団法人ミモカ美術振興財団  
広報担当：佐伯美帆、島田里都子、市川靖子(株式会社いろいろ)  
〒763-0022 香川県丸亀市浜町80-1  
TEL 0877-24-7755 FAX 0877-24-7766  
E-MAIL [press@mimoca.jp](mailto:press@mimoca.jp) URL [www.mimoca.org](http://www.mimoca.org)

## —— 企画展「猪熊弦一郎博覧会」について

2025年4月より、「大阪・関西万博」、「瀬戸内国際芸術祭2025」が開幕します。当館ではその開幕時期に合わせて、4月12日(土)から企画展「猪熊弦一郎博覧会」を開催します。

猪熊弦一郎(1902-1993)は20世紀を丸ごと生きた画家であり、その画業は70年の長きに渡ります。猪熊は一貫して絵画における「美」を追求し、常に新しい表現に挑戦してきました。戦前はパリ、戦後はニューヨーク、ハワイに拠点を置いた猪熊は、画家としての活動だけではなく、国際的な文化交流においても公私に渡り重要な役割を担い、「民間大使」という異名も持ちます。本展ではイサム・ノグチ、マーク・ロスコ、ジョン・ケージ、イームズ夫妻ら世界的なアーティストとの交流や、山口文象、丹下健三、谷口吉生など建築家との協働、デザインの仕事を通して生み出された文化的所産に焦点を当て、香川県を含む国内外に遺した足跡を紹介します。

### 企画展情報

展覧会名	猪熊弦一郎博覧会
会期	2025年4月12日(土)ー7月6日(日)
会場	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
主催	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団 独立行政法人日本芸術文化振興会(予定)、文化庁(予定)

## —— 2月12日(水) 記者発表会(当館 2Fミュージアムホール)

時間	内容
13:30	受付開始(会場:当館 2Fミュージアムホール前)
14:00	記者発表会 1. 当館紹介及び2025年度の展覧会について 中田耕市(副館長兼学芸課長) 2. 企画展「猪熊弦一郎博覧会」について 古野華奈子(担当キュレーター) 3. 四国村ミュージアムでの展覧会「猪熊弦一郎 Form, People, Living 身の回りにある、秘密と美しさ」について 本城琢也(公益財団法人四国家家博物館 常務理事) 小林弘和・山田春奈(クリエイティブユニット SPREAD) 4. 館内ツアー
16:00	終了
16:00ー	個別取材 ※ご希望の方はお問合せください。

## —— 記者発表会のお申し込みについて

お申し込み情報	2025年2月8日(土)までに右のQRコードを読み込みの上、フォームからお申し込みください。	
---------	--	---

## — 2月13日(木) プレスバスツアー —

「瀬戸内国際芸術祭」をはじめ「アート県」として名高い香川県。日本で最も小さな県ですが、アート・デザイン・建築ファンなら見逃せない「世界に誇る美の資源」が豊富に点在しています。そんな歴史をひも解いてみると、猪熊弦一郎がつなぎ役となって、イサム・ノグチや丹下健三など、世界のアーティストや建築家らが香川県を舞台に華ひらいていく時代がありました。本ツアーでは、文化的なメディアーターとしての猪熊の足跡を辿ります。

※下記タイムスケジュールは変更になる場合があります。

時間	訪問先(予定)
08:45	JR丸亀駅 集合
10:00	イサム・ノグチ庭園美術館
11:30	四国村ミュージアム/昼食「わら家」
14:30	香川県庁舎東館(設計:丹下健三)
16:00	JR高松駅 着
16:45	高松空港 着

## — プレスバスツアーのお申し込みについて

お申し込み情報	右のQRコードを読み込みの上、フォームからお申し込みください。 定員に達し次第応募終了とさせていただきます。予めご了承ください。	
---------	---	---

## — プレスバスツアー訪問先のご紹介

### イサム・ノグチ庭園美術館

20世紀を代表する彫刻家であり、ランドスケープやインテリアデザイン、舞台芸術も手がけたイサム・ノグチが1969年から88年に亡くなるまでの間、石の作家・和泉正敏をパートナーとして日本での制作拠点としたアトリエをもとに、1999年に開館。150点あまりの彫刻作品はもとより、自ら選んで移築した展示蔵や住居・イサム家、晩年制作した彫刻庭園など、全体がひとつの大きな環境彫刻となっています。ジャンルを超えた宇宙的でコスモポリタンな、開かれたノグチの世界像を心ゆくまで味わっていただけます。 <http://www.isamunoguchi.or.jp/>

### イサム・ノグチと猪熊弦一郎

猪熊が「心友」と呼ぶ彫刻家のイサム・ノグチ。1950年の来日以来、ノグチが亡くなる1988年まで、二人は生涯絶えることなく交流を続けた。ノグチを香川に結びつけたのも猪熊である。「いい石がある」と猪熊に紹介され香川を訪れたノグチは、金子正則知事(当時)、建築家・山本忠司や和泉正敏と出会ったことを縁に、1969年、牟礼町(現在の高松市牟礼)にアトリエを設けた。現在はイサム・ノグチ庭園美術館となり、国内外から多くの人々が訪れている。

## 香川県庁舎東館

丹下健三設計「香川県庁舎」（現東館／1958年落成、2022年国の重要文化財に指定された）の外観やピロティの他、猪熊弦一郎の陶画《和敬清寂》が設置された1Fロビーなどをご紹介します。

<https://www.pref.kagawa.lg.jp/zaisankeiei/higashikan/kfvn.html#>



香川県庁舎東館 提供：香川県

### 香川県庁舎東館と猪熊弦一郎

1954年、金子正則知事（当時）から香川県庁舎の建設について相談された猪熊は、建築の重要性を説いて、新進気鋭の建築家・丹下健三を紹介する。丹下が手がけた鉄筋コンクリートによる日本伝統建築の表現、開かれたピロティやロビー、意匠的に優れた家具等は国内外で高い評価を受け、彼の初期代表作の一つとみなされるようになった。猪熊は1階ロビー陶画《和敬清寂》を担当、家具の一部は剣持勇がデザインを担当している。この香川県庁舎に端を発し、さらに猪熊と金子知事をハブとする芸術ネットワークは広がりを見せた。猪熊の影響を受け、国内外の芸術家とも交流を続けた金子は、その後も建築や産業デザインの向上に注力し、「建築知事」「デザイン知事」と呼ばれるようになる。現在の「アート県」に繋がる金子の業績であり、その礎を築いたのが猪熊弦一郎であった。

## 四国村ミュージアム

屋島山麓の広大な敷地に広がる野外博物館。江戸時代から大正時代に建てられた住宅や砂糖しめ小屋、農村歌舞伎舞台、米蔵、醤油蔵など、四国4県から移築復元した33棟の建物を体感いただけます。いずれも実際に人が住み、使ってきたものであり、家々の柱や梁、またそこに展示されている多くの民具には、人々の知恵や労苦、祈りが染み込んでいます。四季折々の豊かな自然を感じながら散策すると、鳥の声や滝の音に癒され、現代人が失ってしまった何かにふと気づくかも知れません。また、村内には安藤忠雄氏設計の「四国村ギャラリー」や神戸の異人館だった「四国村カフェ」など、多様な魅力を持つスポットが点在しています。

<https://www.shikokumura.or.jp>



富木田家砂糖しめ小屋 提供：四国村ミュージアム

### 四国村ミュージアムと猪熊弦一郎

屋島山麓の「四国村」は1976年に民家博物館としてスタート、開村式には猪熊も出席した。古い民家の数々を猪熊は大いに喜び、その縁で、四国村麓のレストランとオーナーの住宅（現在はゲストハウスとして利用）の設計に、猪熊が吉村順三を紹介した。丹下健三と並び、吉村順三もまた猪熊と幾度も協働した建築家であり、一般には公開されていないが香川県内に現存する貴重な吉村建築が誕生するきっかけとなったのが猪熊であった。なお、2022年に四国村は「四国村ミュージアム」と名称を変えたが、この名は開村式にあたって猪熊が寄せたメッセージからとられている。

## わら家(昼食会場)

江戸時代末期の藁葺き屋根の民家を移築し、店内も昔の姿そのままに、評判の讃岐うどんを提供。

<https://www.wara-ya.co.jp/>



わら家 提供：四国村ミュージアム

## —— 猪熊弦一郎のプロフィール

- 1902年 香川県高松市生まれ。少年時代を香川県で過ごす
- 1921年 旧制丸亀中学校（現 香川県立丸亀高等学校）を卒業、上京し本郷洋画研究所で学ぶ
- 1922年 東京美術学校（現 東京藝術大学）西洋画科に進学、藤島武二教室で学ぶ
- 1926年 帝国美術院第7回美術展覧会に初入選する。以後、1934年まで毎年出品し入特選を重ねる
- 1927年 東京美術学校を中退
- 1935年 新帝展に反対し不出品の盟を結んだ有志と第二部会を組織、第1回展に出品する
- 1936年 同世代の仲間と新制作派協会（現 新制作協会）を結成、以後発表の舞台とする
- 1938年 渡仏、パリにアトリエを構える（-1940）。滞仏中アンリ・マティスに学ぶ
- 1950年 三越の包装紙「華ひらく」をデザインする
- 1951年 国鉄上野駅（現 JR東日本上野駅）の大壁画《自由》を制作
- 1955年 渡米、ニューヨークにアトリエを構える
- 1975年 ニューヨークのアトリエを閉じ、東京に戻る。冬はハワイで制作するようになる
- 1989年 丸亀市へ作品1,000点を寄贈
- 1991年 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が開館
- 1993年 逝去、90歳



猪熊弦一郎 撮影：高橋章

## —— 開催中の展覧会

### 【企画展】 「第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ」大賞受賞記念 西條茜展 ダブル・タッチ

若いアーティストが独自の才能をはばたかせる場として2022年に始まった公募展「MIMOCA EYE / ミモカアイ」。その第1回大賞受賞者である西條茜(1989-)の個展を開催。本展では陶の作品のほか、制作において息を吹き込む過程のあるガラス作品も発表し、作品と身体との境界をさらに考察します。

### 【企画展】 猪熊弦一郎展 画業の礎—美校入学から渡仏まで

東京美術学校入学から、帝展出品時代、新制作派協会設立、渡仏まで、猪熊の画業の礎とも言える、20代、30代の頃の創作活動を紐解きます。未知なる自分の世界をひらくべく、真摯に「美とはなにか」を問い続けた、若い画家の探究と気付きの軌跡をご覧ください。

### 【常設展】 猪熊弦一郎展 立体の遊び

# 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 (MIMOCA) について

## 〈1991年開館、30年を超える活動〉

1991年11月23日、JR丸亀駅前に開館。同時代の新しい表現を積極的に紹介する「現代美術館」を望んだ猪熊弦一郎の考えを継ぎ、猪熊作品を中心とした常設展、現代美術にフォーカスした企画展、子どものためのワークショップなど、多彩なプログラムを展開しています。

## 〈猪熊弦一郎の作品約2万点を収蔵〉

猪熊弦一郎の遺した絵画やドローイングなど作品約2万点を所蔵し、猪熊が「対話彫刻」と名付けた小さな作品群、猪熊夫妻が各地で収集しその生活を彩っていたコレクションなどの多数の資料とともに、常設展や企画展を通して、猪熊の活動を深く、広く紹介しています。

## 〈現代美術に特化した美術館として〉

現代美術を中心とし、企画展として国内外のアーティストの活動を展覧。これまでにヤン・ファープル、マリナー・アブラモヴィッチ、マルレーネ・デュマス、エルネスト・ネット、杉本博司、塩田千春、ホンマタカシ、石内都らの個展を開催する一方、金氏徹平、小金沢健人、志賀理江子、中園孔二ら気鋭のアーティストの紹介にも積極的に取り組み、近年では若手作家を対象とした公募展「MIMOCA EYE / ミモカアイ」を立ち上げました。また、同時代のクリエイティブな表現にも着目し、ファッションやファニチャーといったデザイン、現代建築にも拡張しています。

## 〈谷口吉生の設計による美しい建築〉

設計は、数々の美術館建築を手がけ、高い評価を受ける谷口吉生。猪熊との対話によって、アーティストと建築家の理念が細部に至るまで具現されています。猪熊弦一郎の巨大な壁画《創造の広場》が眼を引く伸びやかなファサードは、駅前広場と建築をゆるやかに結びつけ、館内に入ると自然光をふんだんに取り込んだ、開放的な空間が広がります。2階には対照的なプロポーションをもつ2つの展示室があり、3階の天井高約7mの豊かなスケール感をもつ展示室へと続きます。さらに、正面左側の大階段はアートへのさまざまなアプローチを可能にするパブリックな空間へと接続しています。2階のアートセンターには、ライブラリー、ホール、スタジオが備わり、3階最奥部にあるカスケードブラザとカフェも来館者に心地よい時間を提供します。



Photo: Yoshiro Masuda

## 【アクセス】 JR丸亀駅南口より徒歩1分

